パウエル議長就任の裏事情

二〇一七年十一月に、ジェローム・パウエルが連邦準備制度理事会（ＦＲＢ）の次期議長に指名されました。彼はユダヤ系ではありません。それまで議長といえば、グリーンスパン、バーナンキ、イエレンと三十年以上、ユダヤ系の金融関係者が就任していました。当然のことです。そのユダヤ資本家の定位置だった議長のポストをトランプは剥奪したのです。当然、彼らは猛反発しました。

しかし、同時期、トランプはケネディ暗殺の機密文書の公開をチラつかせています。これはどういうことだったのか？

私はそのニュースを聞いて、「トランプはＦＲＢに関して、ユダヤ資本と取引をしているな」と思いました。言うまでもなくユダヤ勢力にとっては、「ケネディ暗殺」に、自分たちユダヤがからんでいたという「事実」が公開されるのはヤバいのです。

結局、トランプの推したパウエル議長がスンナリと認められ、その見返りでしょうが、機密文書の公開は見送られましたが、これはトランプが生きるか死ぬかの綱渡りをしていたことを物語っていると思います。一線を超えれば、トランプ暗殺の危険性も十分考えられるからです。

生命のリスクを冒してもなお、「アメリカファースト」という使命感を持って、トランプは戦っているのです。

では、今、アメリカの情勢はというと、トランプのほうがやや優勢です。日本のメディアでは「トランプは相変わらず四〇％の支持しかない」というところばかり強調されます。しかし、反トランプのメディアがそう報じざるを得ないほど、アメリカ国内におけるトランプの支持層は固い。つまり、それだけの支持があると理解するのが妥当です。

「2019年 世界の真実」（馬渕睦夫）2018.6.26

子宮頸がんワクチン

定期接種

※厚労省による積極的推奨はされていません

●何を防ぐワクチン？

子宮頸がんの細胞を見ると、ヒトパピローマウイルスが発見されます。そこで、ヒトパピローマウイルスの感染を防ぐワクチンが開発されました。これが子宮頸がんワクチンです。正式にはＨＰＶ（ヒトパピローマウイルス）ワクチンと言います。全てのヒトパピローマウイルスを防げるわけではありません。このワクチンで子宮頸がんを防いだという実績もまだありません。

●いつ打つの？

中学3年～高校1年生の女子が対象の定期接種です。2価（16、18型）のサーバリックスは1回目から1カ月後と6カ月後の計3回の接種、4価（6、11、16、18型）のガーダシルは1回目から2カ月後、6カ月後の計3回の接種とされています。

●いつからあるワクチン？

子宮頸がんワクチンは２００６年にアメリカで発売が始まりました。日本に入って来たのは２００９年です。２０１０年には自治体で補助金が出されるようになりました。２０１１年の東日本大震災の時に流れたテレビＣＭで一気に接種率が上がり、２０１３年からは定期接種となります。しかし、接種後の健康被害が多発したため、2か月後、厚労省から「積極的勧奨はしない」という勧告が出されました。

●必要性は？

ワクチンを打っても検診は必要と言われている通り、このワクチンで子宮頸がんを防げるわけではありません。一方で、副作用の報告があまりに多すぎます。ワクチン接種後に出た副作用は、けいれん、失神、関節や筋肉などの全身の激しい痛みのほか、記憶障害など、重い後遺症を残す重篤な症例ばかりです。脳がおかされるアデムや末梢神経の障害が起きるギランバレー症候群も多発しました。

定期接種に入っていますが、このワクチンを打つメリットはありません。

「子どもと親のためのワクチン読本」（母里啓子）2019.6.2

■「接種奨励が差し控え」になった子宮頸がん予防ワクチン

記憶に新しいところでは、子宮頸がん予防ワクチンも「救世主」のように注目を浴び、しばらくしてから副作用が明るみに出て問題になりましたね。

病気の原因となる細菌やウイルスなどをあらかじめ接種しておき、病気を防ぐのが予防ワクチン。子宮頸がん予防ワクチンは、発がん性のあるヒトパピローマウイルス（ＨＰＶ）のうち、子宮頸がんの原因として多く報告されている16型と18型の抗体を作るものです。「注射で女性特有のがんが防げる」ということで、国が全面的に後押しをし、２０１０年から多くの自治体が女子中高生への接種を無料化しました。

自費で打てば何万円もするワクチンですから、「無料のうちに」と親も積極的に勧めたのでしょう。多くの女子中高生がワクチンを接種することになりました。

さらにメディアで取り上げられたことで、子宮頸がん予防ワクチンの知名度はグンと上がり、接種を希望する女性は有料となる18歳以上にも広がったようです。

前述の通り、この子宮頸がんワクチンが予防できるのは、ＨＰＶ16型と18型です。全ての発がん性ＨＰＶの感染を防げるものではありません。

さらにこのワクチンは海外で製造された輸入ワクチンで、欧米では子宮頸がんの原因としてＨＰＶ16・18型が7～8割と多いのですが、日本人のＨＰＶ16・18型は約60％。確かに最も多いのですが、海外に比べると期待できる効果が低くもあります。

そのためＨＰＶ16・18型予防に海外で製造された輸入ワクチンは、日本人に対する予防効果がさらに限定的であるということです。

そして、予防ワクチンを接種する人が増えていく中で、副作用の報告が次々とあがってきたのです。手足のしびれ、失神といった一時的なものから、「四肢の運動能力低下」「歩行不能」といった回復が難しい重篤なケースまであります。

積極的にワクチンの接種を奨励していた国も、この結果を受けて、２０１３年6月に「積極的な接種奨励の差し控え」を決定したのです。

実は、副作用が話題になる以前に、私は何人もの女性の知り合いから、接種すべきかどうかの相談を受けました。「娘に打たせようと思っているんだけど」と言う母親世代の人もいれば、「高いけど打ったほうがいいかしら」と言う中高年の女性もいましたが、私は年齢を問わず、誰に対しても「絶対に打っちゃダメ」ときっぱり答えました。

副作用の心配ももちろんありましたが、そもそも子宮頸がんの原因とされるＨＰＶは、性交渉で感染するものであり、性交渉をしたことのある女性ならほとんどが一度は感染しているからです。裏を返せば性交渉を経験した女性に関して言うなら、このワクチンはほとんど意味がないということです。

ところで、ＨＰＶに感染しながらも、多くの人が子宮頸がんを発症しないのはなぜでしょう？

それは自分自身の免疫力でウイルスを排除しているからです。

ＨＰＶというのは、現代に特有のウイルスではありません。昔からあったウイルスです。

子宮頸がんによる死亡者が、ここ20年間で1・5倍に増えたといわれていますが、その要因は、ＨＰＶが急増して感染者が増えたからでもなければ、ＨＰＶが発がん性を急激に高めたからでもありません。

現代人の免疫力が低下し、発症する人が増えたからに他なりません。

子宮頸がんに限らず、私たちは病気を予防する目的でいろいろなワクチンを打ちます。予防の意識を持つことはいいことですが、接種後に何が起こるかわからない予防ワクチンを打つことよりも、たとえウイルスに感染しても発症させない免疫力を自ら持つことのほうが、よほど大事だと私は思います。

「薬剤師は薬を飲まない」（宇多川久美子）2013.12.26

褐色の肌の姫と7人のおっさんとおばさんとクリーチャー

最近の先進国のトレンドとして政治的に正しいポリティカル・コレクトネス（ポリコレ）な映画やテレビ番組、雑誌、ニュースなどを配信することが当たり前になっています。

日本と異なり、特に人種や宗教などが多様な欧米ではこのポリコレコンテンツを配信することへの圧力が凄まじいです。各地のテレビやネット、書店などを覗くと実に当たり障りのないコンテンツだらけどころか、なんとこれまでの古典やスーパーヒーローの話をポリコレに合うように思いっきり作り替えてしまうことが起きています。

この圧力がひどくなったのはここ15年ほどです。さまざまな活動家や圧力団体からの働きかけにより特に大きな企業ほどポリコレに配慮したコンテンツを提供しなければビジネス活動が批判される状況になっているのです。

たとえば２０２４年3月にリメイク映画が公開予定のディズニー『白雪姫と7人の小人』は、もはや題名さえも変更され『白雪姫（スノーホワイト）』です。

原作ではドイツ系で真っ白な肌のはずの白雪姫はもはや白人ですらなく、コロンビア系アメリカ人で褐色の肌のレイチェル・ゼグラーが演じます。彼女は自身のツイートで、「はい、私は白雪姫です。私はその役割のために肌を漂白していません」と投稿、のちに削除しました。

7人の小人は「無用な偏見を植えつける」という理由から「魔法の生き物」に置き換えられていますが、性別、民族、身長が混在した「7人のおっさんとおばさん」の軍団に変わっています。白雪姫は可憐なプリンセスではなく、強いリーダーシップを持った強い女性に変更されました。しかも意地悪な継母は、ワンダーウーマンのスターで、かつイスラエル人のガル・ガドットで、これまた人一倍強い女性です。

『白雪姫と7人の小人』はもともとドイツのグリム兄弟が１８１２年にドイツなどのさまざまな民話や童話を集めた際に出版されたものです。ドイツの民話などが元になっており、その元となった話は中世から存在していたとされています。さらにドイツのいろんな都市も、我が地方の民話が起源だと主張してきたことで有名です。

査読付きの学術雑誌『ジャーナル・オブ・アメリカン・フォークロア』に掲載された「The New Comparative Method: Structural and Symbolic Analysis of the Allomotifs of "Snow White"」と呼ばれる論文のレビューによれば、白雪姫の話はヨーロッパのさまざまな民話の影響を受けているようです。

この話に登場する娘の死を望む邪悪な継母は、ヨーロッパの古い民話や典型的な話に引きずられています。ギリシャ神話に登場する邪悪で憎しみと嫉妬心に満ちたメデアとフェードラ、またアイルランド神話、ウェールズ、そして北欧の昔話にも登場します。

古くからヨーロッパでは、ドワーフ（小人）やゴブリンのような小さな身体をした妖精は神話の中における重要なキャラクターです。地下で鉱業や金属加工に従事し、魔力を持ったハンマー、龍を倒す武器、宝石などをつくる重要な役割を果たしています。

ニーベルンゲンの歌にも登場します。近年だとイギリスのファンタジー作家であり、北欧の神話や民話をモチーフとしていたオクスフォード大学の言語学者であるトールキンの『指輪物語』『ホビット』でも主要キャラクターです。

古来よりヨーロッパの伝説や昔話では小人は神聖な存在であり、深い意味を持つキャラクターでした。ところがアメリカに連れてこられた『白雪姫と7人の小人』のお話で

「世界のニュースを日本人は何も知らない⑤」（谷本真由美）2023.12.25

は、小人たちはただ単に幼稚な子どものようなキャラクターとして描かれ、その神聖さや魔術の重要性が取り払われてしまっているのです。おそらくアメリカ人には北欧神話やギリシャ神話の知識がなかったのでしょう。

こうした奇異な展開を日本に置き換えてみました。日本の民話や伝承、歴史的事実をアメリカ人が勝手に自国へ持って帰り、ハリウッドで政治的に正しい話にしてしまうのです。たとえば豊臣秀吉は背が低いおっさんではポリコレ的には正しくないので、アフリカ系の巨大な女性に置き換えられるでしょう。

切腹やはりつけは残酷なのでデコピンにすり換えられる可能性もあります。

桃太郎も悪い鬼を退治するという話はなんとも差別的なので、まずは桃太郎自身がゲイに置き換わり、桃から全裸で出てくるのは教育的によろしくないのでウェットスーツを着たままになるでしょう。そしてここは多様性を反映すべく、桃太郎を拾ってくるおじいさんとおばあさんはロシア人と中国人になるはずです。

さらに動物を家来にするのもこれまた差別的なので、桃太郎と家来は立場が同等で、きちんと契約を結び金銭的なやり取りも発生します。家来になる動物や人々には発達障害者、トランスジェンダー、高齢でおむつをしている人も入れなければなりません。

こうして鬼たちは退治されるのではなく、桃太郎たちとの話し合いと、「あつまれ どうぶつの森」をやって仲良くなって「めでたしめでたし！」という結末になるかもしれません。このようにアメリカはヨーロッパの古典的なお話に、こういった改変を勝手にやっているのです。

アメリカのディズニーが制作している白雪姫は、長い伝統と歴史があるヨーロッパの伝説や民話を元にした大変深い話の『白雪姫と7人の小人』を自分の国へ勝手に持ってきて、表層的な考え方で政治的に正しい話につくりかえました。それは薄っぺらなアメリカ的イデオロギーが全面に出ているものになったというほかないでしょう。

やはり自分のところの歴史が浅い部分は、他の土地の伝統や歴史の重みに敬意を払うべきであるということが理解できていないのです。

「世界のニュースを日本人は何も知らない⑤」（谷本真由美）2023.12.25

ポリコレやり過ぎでディズニー大失敗！

このようなアメリカのやりたい放題なポリコレに消費者は口を閉ざしているわけではありません。過去10年間でディズニーはこれまでより進歩的なイメージを創る方向にビジネスを引っ張ってきました。ストリーミングサービス「Disney＋」の立ち上げ以来、特に左寄りのコンテンツを重視し、子どもには古典を改変したコンテンツを流して親にも観てもらえるように説得しています。

ところが消費者は、自分たちが慣れ親しんできた古典的なお話やスーパーヒーローまでポリコレになってしまうことに多大な不満を抱いています。それが揺り戻しを引き起こす状況になっているのです。

左系に寄り過ぎたコンテンツは内容が微妙なので、消費者離れを引き起こしています。２０２２年第４四半期だけでDisney＋は２００万人以上の加入者を失ったことが発表されています。古いキャラクターを進歩させ、ドラマや映画から不快なイメージを取り除きましたが、行き過ぎたコンテンツからはおもしろさが消えたのです。

さらにディズニーにはネット上では「反白人プロパガンダ」「Wokeショー」といった呼び方をされるアニメまで登場しています。このWokeとは、差別問題や人権問題などに対して「自覚している」といった意味で使われるスラングです。

またブルース・スミスが監督した『The Proud Family: Louder and Prouder』（全力！ プラウドファミリー）では黒人の子どもたちが黒人に対する社会の賠償についてラップし、「奴隷がこの国を建てた」といったことが大問題になり反論が起こりました。

さらにこの番組の中では、アフリカ系男性のキャラクターが白人男性の配偶者に白人の心の脆さ（white fragility）について説教するシーンが登場します。

これは白人たちが人種問題に向き合えない脆さを表現する言葉で、米国の社会学者ロビン・ディアンジェロが２０１８年６月に出版した著書『ホワイト・フラジリティ　私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？』によって定義された著者の造語です。

白人は普段から自分の人種に関して考えることがないので、少しでも人種に関する話題を出されるとオーバーリアクションし、自己正当化に走るという論考です。

ところがこの番組は土曜日の朝、小学生向けに放送されるアニメで、番組中にアフリカ系の人が白人を延々と非難するので「過激すぎる、政治的すぎる」と批判の的になりました。

さらにディズニーが２０２２年後半にリリースしたアニメ映画「ストレンジ・ワールド」の興行収入が思わしくなかったのも今のトレンドを象徴しています。この作品はディズニー初、ゲイのキャラクターが主人公として制作されました。

ところが１億２０００万ドルから１億３０００万ドルの巨大な予算が投入されたにもかかわらず、アメリカの感謝祭でなおかつ週末の興行収入で２０００万ドルさえ稼ぎだせず大失敗作品となります。最終的には７３００万ドルの収益を上げたにすぎません。

これはディズニーがもっとも失敗した作品である２００２年の「トレジャー・プラネット」の１億１０００万ドルを下回ってしまいました。

一般観客による評価も悪く、映画評価の調査会社のシネマスコア（Cinema Score）で「B」となり、Aマイナスを下回る最初のディズニーアニメーション映画になりました。

「小学校低学年が観るアニメなのに性的なことを語ってほしくない」「性教育が必要なら家でやる」など評価サイトやXを見ると、保護者と思われる人からの苦情が大量に掲載されています。アメリカのXユーザーであるパトリック・ベト・デイビットさんは、「子どもと観にいったら開始10分で映画館を出たいと言いました。ディズニーは誰がお金を払って映画を観にくるのか忘れている」と述べています。

このようなディズニーをはじめとする行き過ぎたポリコレコンテンツは「Get Woke, go broke」、つまり「Wokeをやって破産」とネット上で揶揄されています。

「世界のニュースを日本人は何も知らない⑤」（谷本真由美）2023.12.25